# 福武先生の御逝去を悼む

蓮見音彦

福武直先生が、急逝されたという電話を受けたのは、七月二日日曜日の朝であった。八六年一月に先生の奥様がなくなった頃に心臓を患われてから、心配はしていたものの、この春には中国を訪問されるほど元気にしておられただけに、信じられない思いが先にたってしまった。この日の早暁に、気分が悪いといわれて入院され、医師の手当を受ける間もなく心筋梗塞の発作を起こされて亡くなったとのことである。

東大を定年で退官されたあとは、社会保障研究所長や大学生協連の会長などの仕事をされ、最近は年金制度の改正などのおりに審議会の会長としてテレビニュースに登場されるなど、社会保障などの領域での活躍が主になっていた。そのため近年は大会に顔を出されることも少なかったが、村落社会研究会の創立の推進者の一人として、先生はこの会にはずっと深い関心を持ち続けてこられた。

先生と村研との関係はきわめて深いものがあるが、その中でもとくに二つの点を思い起こさなければなるまい。第一には、村研の設立の頃の事情である。村研の第一回大会が開かれたのは一九五三年であるが、その前年五二年には長野県西塩田村で日本人文科学会の「社会的緊張」を主題とする研究の一環として、有賀先生を班長に、福武先生とともに小池基之・永原慶二・大内力・内山政照の諸先生など、きわめて学際的な顔ぶれが集まった農村班の調査が行われ、さらに、日本社会学会が、国際的な共同研究として進めた「社会的成層と移動」の一環として、全国の多くの農村社会学者が参加した「農村SSM」調査が準備されるなど、社会学の内外で大きな共同調査が進行していた。こうした背景の上に、五二年の日本社会学会大会が、東京大学と有賀先生のおられる東京教育大学とで開かれた機会に農村研究者の集まりを作ることが提案され、翌年の第一回大会へ向けて、農業経済学や経済史などの研究者を含めた稔り多い組織となるように積極的な勧誘が行われるなど、熱のこもった準備が進められることになる。村研の創設・最初の段階でのこの会の性格付けを行った重要な動きの中で、有賀先生・福武先生などの結び付きがきわめて大きな役割を果たしたことは広く知られている。

もう一つは、村研がかつて行った「村落社会調査研究叢書」の刊行のことである。調査研究の報告を出版できるようにしようと「有賀さんから農村のSSM研究の調査費残額約一〇万円を預かっていたので、これに私の調査費の余りを加えて、その刊行資金とした。そして売り切れたら刊行費を出版社から基金にかえしてもらい、さらに継続出版してゆこうと考え」られたのである。この叢書のために福武先生は前後かなりの資金を寄付され、その結果四点の報告書が刊行されたのであるが、残念なことには結局基金の回収ができずに、「ぽつぽつ私の力も枯渇してきた。何んとかしたいとは思うが、あまり望みはない。」（著作集別巻・社会学四〇年一六六頁）と言うことになり、それ以後先生の意をくんで資金の寄付を続けようという人は現れず、この叢書は中断されてしまっている。

しかしこうしたこと以上に、村研にとって重要なのは福武先生の農村研究が、村研会員の大多数にとって、あるいは研究の出発点と

なり、あるいは省みるよりどころとなってきたことであろう。先生自身で、あるいは先生を中心に行われた調査研究は、きわめて多数におよぶが、それらは戦後改革の過程での農村民主化の課題から、日本の復興・成長の過程での農村社会のかかえる課題を次々に対象としていた。これらの主題は、激しい農村社会の変動の過程を反映するものであっただけに、先生自身でこれらを素材として日本農村についてのバランスのとれた概観を行い、それが広く影響力を持ったばかりでなく、多くの研究者もその研究を配慮しながら自身の課題を選択して研究を展開して行った。また、先生の方法論ともいうべき、農村社会の構造分析の方法は、調査研究の方法として多くの研究者の調査方法の指針となった。先生の同族型・講組型という村落類型論は、大きな影響を持ち、日本の地域類型論の研究に刺激をあたえ、研究をうながした。

農村の民主化が日本社会全体の民主化にとって重要な前提をなすとし、戦後農村のかかえる問題の根源を自立しがたい過小農経営に求め、その克服を通じて民主的な農村社会の確立を目指していた先生は、六〇年代後半以降、過小農経営の克服という視点との関わりのもとに、離農問題や農業者年金の調査を主宰される。農業者年金自体は不十分なものとされたが、この調査を契機に国民年金審議会などとの関わりを深めて、社会保障制度の研究へと研究関心を広げて行かれることになる。こうした形での先生の研究関心の移行が、農村社会そのものの変化に起因するのか、大学紛争などの研究条件によるのか、それともわれわれのサポートの仕方が悪かったためか、今となっては分からない。農村社会学においてもこの時期は戦後農村の展開やその評価をめぐって重要な論議の行われてきた時期であった。先生が社会保障制度に主要な関心を移しておられて、これらの論議にさほど積極的に加わられなかったことは、われわれからすれば残念なことであった。もし先生が以前のように農村研究を積極的にリードされたならば、その後の研究動向も異なる展開をたどったのではないかと思われる。しかし、それはわれわれの甘えに過ぎる言い方であろう。福武先生は、農村社会学者から、日本の社会や社会保障を論じるより大きな役割を果たされ、その領域でも指導的な役割を果たされたのであり、われわれとしてもそれを喜ばねばなるまい。

いずれにしても、今やわれわれは先生を喪ってしまった。先生のご冥福をお祈りするとともに、村研も改めて世代交代の時期を迎えていることを感じないわけには行かない。

（東京大学文学部）